

September 2007

# 大阪大学図書館報

vol. 41 no. 1 通巻 160号

発行所 大阪大学附属図書館 2007年9月30日発行  
〒560-0043 豊中市待兼山町1の4

e-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp



## CONTENTS

- ▶ 基盤としての大学図書館 …P. 1-2
- ▶ 「わたしのおすすめ本」 **連載 その1** …P. 3
- ▶ 教員著作寄贈図書のご紹介 …P. 4-5
- ▶ 海外の図書館訪問報告 …P. 6-7
- ▶ OPAC が新しくなりました …P. 8



## 基盤としての大学図書館

小泉 潤二



8月26日に大阪大学理事・副学長に就任しました。教育と情報を担当し、大阪大学附属図書館長を務めます。専門は文化人類学・中南米研究で、長年にわたって中米でフィールドワークをしてきました。人間科学研究科とグローバルコラボレーションセンター (GLOCOL) の教授を兼任しています。

私は、大学図書館は大学における研究と教育の最も重要な基盤の一つだと考えています。最も素晴らしい大学には最も素晴らしい図書館があり、逆に最高の図書館は最高の大学をつくっています。

そのように言うのは私自身の個人的経験があります。日本で修士まで終えたとき、アメリカに留学する機会がありました。日本学術振興会の米国派遣留学生として、最初にハワイ大学で図書館利用や情報活用の手ほどきを受けた後、スタンフォード大学で Ph. D. の訓練を受けることになりました。

スタンフォードでそれまでまったく知らなかった図書館システムに出会い、革命的といってよいほどのインパクトを受けました。そこには、論文や書籍、新聞やパンフレットなど、あらゆるものについて情報がありました。すべてが網羅的に集められ、検索が容易な状態で系統的に整理されていました。サンフランシスコ南東のスタンフォード大学は、サンフランシスコ北東のカリフォルニア大学バークレー校と連携して図書館システムを構成し、収集はさらに穴のないものになっていました。基本的にすべての資料が開架式で、早朝から深夜まで利用が可能でした。見当たらない本があっても貸し出し状況がすぐわかり、間もなく戻ってくると同時に使えるよう予約ができました。授業のための必読論文や参考書籍がすべて図書館のカウンターに用意され、4時間とか2時間に限って貸し出されるようになっていました。図書館の中には個人別に指定されたデスクや個室があり、きわめてプロフェッショナルな館員が常時利用者を支援しようと

待ち構えていました。1970年代のことですのでコンピュータ化が進んでおらず、カードカタログやマイクロフィッシュなどによる情報整理でしたが、極限まで合理性が追求されており、コンピュータの導入により効率が飛躍的に上昇することは明らかでした。Humanities and Social Sciences Index や Social Sciences Citation Index をはじめとする「インデックス」と呼ばれる情報源は、留学前の日本の人文社会科学では使われていませんでしたので、その強力さと便利さには、徒歩で旅していたところ、急に自動車で旅行する、あるいは飛行機で移動することが可能になったくらいの巨大な違いを感じました。

こうした大学図書館が研究者や学生を強力に支えていました。徹底して完全さを目指す図書館システムには、アメリカに最高のものがあるのではないかと思います。利用者を利用者の立場からいかに効率的にサポートするかという観点から、すべてが構築されていました。ですから私は、一時期図書館の中に「住んで」いたように思います。授業時間やアポイントメントの時間以外は図書館にいたように思います。

図書館についてさらに知ることになったもう一つの機会は、大阪大学の教授になってから、プリンストン高等研究所の社会科学部門に招聘されたときです。アインシュタイン、数学者クルト・ゲーデル、歴史家ジョージ・ケナン、ゲーム理論やノイマン型コンピュータのフォン・ノイマンなどの名で知られるこの研究所は特殊なところで、数学、自然科学（つまり物理）、歴史研究、社会科学という偏った4部門しかありません。常任の教授は全部で二十数人ですが、全員が主要大学の教授の中からとくに選ばれた教授たちです。その常任教授たちが、すべての部門を合計して200人ほどの研究者たちを、1年任期の招聘研究員(Member)として全世界から集め、毎週セミナーを開きます。それ以外の時間は、すべての義務から離れて研究に没頭します。自然科学であっても実験設備は何もなく、ただ考え議論し執筆するだけの場所です。私が招聘研究員となった1996年には、社会科学部門の常任教授は人類学者クリフォード・ギアツ、政治哲学者マイケル・ウォルツァー、歴史学者ジョン・スコット、開発経済学者アルバート・ハーシュマンだけでした。招聘研究員は十数人でした。そこでの唯一の義務は、研究所の大きなレストランで毎日みなと一緒に昼食を取ることで、毎週のセミナーの方は、みな参加していましたが義務ではありませんでした。昼食時の議論がなにより重要でした。それを通じて「知的

自由」とは何であるかについて知ることになりました。

森に囲まれたこの研究所から遠くないところにプリンストン大学があり、その図書館を自由に使うことが可能でしたが、これも卓越した施設でした。しかしそれより印象的だったのは、プリンストン高等研究所の小さな図書館です。小さいといっても、研究者数を考えれば極端に充実しており、すばらしいコレクションを備えた美しく静かな場所でした。資料が非常に優れた集め方をされていることは明らかで、それは博士号を持ったライブラリアンによっていたからだと思います。この人は本当の専門家で、研究者たちのために文献調査やデータ提供をするばかりでなく、たとえば教授の本（つまり教授が読むべきと思われる本）を選び入手して教授のデスクへまわすことも役目の一つでした。

この人は私の在任中に、有名な大学の歴史学教授になりました。アメリカの場合、研究者が書くものとそれを読む読者の間には、強力な編集者(editor)が介在しますが、それと同じように研究者が読むものと研究資料の間にも、強力なライブラリアンや図書館が介在するということだと思います。

大学図書館の基本は、このように利用者の研究そして教育を、利用者の観点から支えていくことでしょう。アメリカのシステムを模倣する必要はありません。しかし、よいところは取り入れて私たちのシステムを改善していくことが必要です。

現在、図書館というものが大きな変動の中にあると思います。電子ジャーナル問題はその明確な現れですが、サイバーメディアとの関係のあり方全般や映像資料収集の問題などは今後重要性を増し、図書館を変えていくかもしれません。

どのように変わっていくにしても、図書館の充実が大学の充実に結びつくという点は変わりません。資源は限られており、その中で建物の改修や設備の更新やコレクションの拡大をすることが必要です。それでもそうした制限の中でよりよいものを目指していくことは可能です。研究者の生命線である研究基盤を充実し大学の発展に結びつけるために、図書館と大学の力を合わせていければと思います。

(こいずみ・じゅんじ 附属図書館長、理事・副学長、教育・情報室長、情報基盤デザイン機構長、人間科学研究科教授、グローバルコラボレーションセンター教授)



## 大阪外国語大学附属図書館は、 大阪大学附属図書館箕面分館 となります

大阪大学と大阪外国語大学の統合により、平成19年10月1日付けで大阪外国語大学附属図書館は、大阪大学附属図書館箕面分館となります。



※毎回執筆者を変えて、連載していく予定です。



## わたしのおすすめ本

連載 その1

# 『わたしが・棄てた・女』 遠藤 周作 (講談社文庫) 1972 上村孝子



遠藤周作文学全集 5 (新潮社)  
#豊中本館に所蔵あります  
請求記号: 918.68/END/5

人との出会いほど不思議で魅力的なものはないと思う。出会った当初は気付かずとも、後々、その出会いが自分の人生にとっても意味のある出来事になるかもしれない。出会いの裏にはそんな期待感と意外性が秘められている。今回取りあげた『わたしが・棄てた・女』の森田ミツは、そんな出会いの意味も込めて私が紹介したいと思う人物だ。

作品の舞台は戦後間もない東京。金と女に飢える貧乏学生の吉岡努(わたし)は、偶然見かけた雑誌の文通相手募集の広告を見て、町工場で働く田舎娘、森田ミツと出会う。吉岡にとってミツは、自分の欲望を満たすためだけに引っかけた、いわば行きずりの女。しかし、このたった数回逢引きしただけで別れた女が、後に吉岡にとって聖女とも言うべき存在となり、彼女の生き様はその後の吉岡の心に確かな痕跡を残していく。

実は棄てられた後もミツは、吉岡を一途に愛していた。そんな彼女は職を転々としたあげく、ハンセン氏病と診断されて療養所に送られる。数週間後、診断が誤りだったことを知らされるも、ミツはその「苦しむ人々にすぐ自分を合わせられる」という性質から、療養所にとどまって患者たちの世話に短い生涯を捧げることになるのである。

遠藤周作の作品は『沈黙』のように、キリスト教色の強いものが印象的だが、『わたしが・棄てた・女』は比較的宗教色の薄い作品だと思う。ミツ自身は信仰を理由に愛を実行したわけではなく、理由なき愛に生きた人物として描かれている。そんな彼女は、決して特異な人物でも立派な人物でもなく、ともすれば社会の中に埋没して忘れ去られていくようなタイプの人間なのに、人の琴線に触れる生き方をしている。

吉岡と同じく、私にとってもミツは印象的な人物だ。初めてこの作品を読んだとき、夢中になって一気に読み終えた記憶がある。それはミツの愛情の一途さや純粋さに心動かされたから、そして彼女が味わっている孤独や次々に訪れる不幸に何かやるせない思いを感じたからだった。今思えばこのとき、ミツは私の心をとらえ、その片隅に自身の存在をはっきりと刻み付けていったのだろう。

ミツという人物を知ってどう感じるかは読者それぞれの考え方と思うけれど、彼女が普通にはない生き方をしていることは確か。その生き方をきっかけに「愛」について考えてみるのも面白いと思う。ぜひ一度『わたしが・棄てた・女』を通して森田ミツに出会って欲しいと思います。

(うえむら・たかこ 文学部4年、附属図書館)



## 電子ジャーナルを 学外からも使えます！

### 大阪大学ポータルを経由

大阪大学個人 ID を持っている方なら、大阪大学ポータルを経由して電子ジャーナルを学外からもご利用いただけます。かねてより強い要望がありましたが、このたびようやく実現しました。ぜひ研究にお役立てください。

(大阪大学ポータル URL: <https://portal.osaka-u.ac.jp>)

ただし、ご利用になれるのは、出版者との契約により、学内構成員に対し、学外からの利用が認められている一部の電子ジャーナルのみです。詳細は、大阪大学ポータルにログイン後の電子ジャーナルの画面でご確認ください。



## いちよう祭展示会を 開催しました

### 今年のテーマは「図書館にはこんなに 電子情報があったんだ!!」

4月30日(月・祝)と5月1日(火)、附属図書館 豊中本館2Fで、展示会を開催しました。附属図書館の電子情報サービスをご紹介します、実際に使って体験していただきました。



# 教員著作寄贈図書のご紹介

## 2006. Oct. ~ 2007. Jun.

寄贈者氏名 (所属) ※敬称略	書名 (出版者, 出版年) ▲寄贈者のコメント
岡田善雄 (名誉教授)	いのちの科学を語る : 岡田善雄対談集(千里ライフサイエンス振興財団, 2007)
但徠道夫 (名誉教授)	相転移の分子熱力学(朝倉書店, 2007)
森安孝夫 (文)	シルクロードと唐帝国 (興亡の世界史 第05巻)(講談社, 2007)
天野文雄 (文)	世阿弥がいた場所 : 能大成期の能と能役者をめぐる環境(ぺりかん社, 2007)
中山康雄 (人間科学)	言葉と心 : 全体論からの挑戦(勁草書房, 2007)
下倉雅行 (法)	教養の情報科学 : 短期間で学べる理論と実践(北大路書房, 2006)
上川龍之進 (法)	経済政策の政治学 : 90年代経済危機をもたらした「制度配置」の解明(東洋経済新報社, 2005)
友部謙一 (経済)	前工業化期日本の農家経済 : 主体均衡と市場経済(有斐閣, 2007) ▲近世初期から戦間期にいたる日本農村を舞台に、農家が市場経済の成長と変化に対していかなる対応をしてきたのかを経済学の主体均衡と人類学的方法で分析した。
稲葉章 (理)	アトキンス物理化学要論 (第4版)(東京化学同人, 2007)
前田和久 (医)	太らない、病気になる、おいしいダイエット(光文社, 2003)
早川和生 (医)	コミュニティアズパートナー : 地域看護学の理論と実際 第2版(医学書院, 2007) コミュニティアズパートナー : 地域看護学の理論と実際(医学書院, 2002) 双子の母子保健マニュアル(医学書院, 1993) 地域精神保健看護(医学書院, 1999)
舘村卓 (歯)	ゼムリン言語聴覚学の解剖生理(医歯薬出版, 2007)
奥俊信 (工)	ドミニク・ペロー Would you like to wrap it? : Dominique Perrault at Osaka University(大阪大学出版会, 2007)
森田清三 (工)	Noncontact atomic force microscopy(Springer-Verlag, 2002) ▲絶縁体の原子も観察できる非接触原子間力顕微鏡法(NC-AFM)の世界初の英語の専門書。非接触原子間力顕微鏡法分野の世界の標準的な教科書ともなっている。 Roadmap of Scanning Probe Microscopy(Springer-Verlag, 2006) ▲ナノテクノロジーに必要不可欠な評価・分析ツールである走査型プローブ顕微鏡(SPM)の未来予測(ロードマップ)を紹介した世界初の英語の本。日本学術振興会のナノプローブテクノロジー第167委員会が中心となり纏めたレンズを使わない走査型プローブ顕微鏡(SPM)のロードマップ。日本語の2回目のロードマップをもとに世界初の英語のロードマップを作成した。 走査型プローブ顕微鏡 : 最新技術と未来予測(丸善, 2005) ▲ナノテクノロジーに必要不可欠な評価・分析ツールである走査型プローブ顕微鏡(SPM)の未来予測(ロードマップ)を紹介した前回の2000年の本を5年後にバージョンアップした本。日本学術振興会のナノプローブテクノロジー第167委員会が中心となり纏めた走査型プローブ顕微鏡(SPM)のロードマップ。前回の本は基礎的な原理の紹介とロードマップで有ったが、今回は、最新の技術や研究成果の紹介とロードマップを纏めた。 走査型プローブ顕微鏡 : 基礎と未来予測(丸善, 2000) ▲ナノテクノロジーに必要不可欠な評価・分析ツールである走査型プローブ顕微鏡(SPM)の未来予測(ロードマップ)を紹介した世界初の本。日本学術振興会のナノプローブテクノロジー第167委員会が中心となり纏めたレンズを使わない走査型プローブ顕微鏡(SPM)のロードマップ。 はじめてのナノプローブ技術(ビギナーズボックス ; 18)(工業調査会, 2001) ▲小さなプローブを試料表面に近づけて、近接場でプローブを試料表面に沿って走査することにより、高分解能の顕微鏡像を得ることが可能なレンズを使わない走査型プローブ顕微鏡(SPM)の全てを判りやすく紹介する入門書。 原子・分子のナノ力学(丸善, 2003) ▲文部科学省の科学研究補助金特定領域研究(B)「原子分子のナノ力学」による研究成果を中心にまとめた本で、高性能の原子間力顕微鏡法分野の原理から最新の成果までを紹介した本である。
森藤正人 (工)	金属間化合物の電子構造と磁性 : 3d-pnictidesを中心として(大学教育出版, 2007) ▲電子が見せる不思議な世界。金属の磁性という、古代から知られていながら今も未解明の部分を残す魅力的な分野について、理論・実験の両面から最先端の研究を行ってきた研究者が解説。最近亡くなった、望月和子阪大名誉教授の遺作。
谷口滋次 (工)	高温酸化の基礎と応用 : 超高温先進材料の開発に向けて(内田老鶴圃, 2006)
Dan Ricinchi (基礎工)	New Developments in Advanced Functional Ceramics(Transworld Research Network, 2007) ▲コメントはWebページ ( <a href="http://www.library.osaka-u.ac.jp/kyoin/Ricinchi-comment1.html">http://www.library.osaka-u.ac.jp/kyoin/Ricinchi-comment1.html</a> )
熊谷悦生 (基礎工)	データ解析の視点から (Rで学ぶデータマイニング 1) (九天社, 2007) ▲統計処理言語Rをつかったデータマイニングの解説と、主として合計特殊出生率に関するデータ解析をRで行なった。 統計学を拓いた異才たち : 経験則から科学へ進展した一世紀(日本経済新聞社, 2006) ▲統計学に関する異才たちに焦点をあてて、20世紀に統計学が切り開いた話題を分かりやすく記述してある訳本である。数式が一切ないのが特徴。授業の副読本として活用している。

<p>ヨコタ村上孝之 (言語文化)</p>	<p>Don Juan East/West : on the problematics of comparative literature (State University of New York Press, 1998)          ▲ドン・ファンと色男の比較 (とその不可能性) を例に挙げながら、比較文学という学問に内在する普遍主義、人文主義を批判したもの。          マンガは欲望する (筑摩書房, 2006)          ▲ポスト構造主義の知見をさまざまに援用しながら、現代日本マンガの特性をいろいろな角度から論じたもの。          色男の研究 (角川選書 ; 406) (角川学芸出版, 2007)          ▲古今東西の「色男」のありようを、主に文学作品を例にとりながら描出し、そのうえで、とくに日本の江戸時代の色男が、「恋愛」の発生とともに減びたさまを描き、今日の日本人の恋愛意識のありようを批判的に検討したもの。          性のプロトコル : 欲望はどこからくるのか (新曜社, 1997)          ▲現代日本における「好色」から「恋愛」というパラダイムの変化を歴史的にたどり、近代日本のセクシュアリティの変遷を描き出したもの。</p>
<p>岸本忠三 (生命機能)</p>	<p>現代免疫物語 : 花粉症や移植が教える生命の不思議 (ブルーバックス ; B1551) (講談社, 2007)</p>
<p>藤田一郎 (生命機能)</p>	<p>「見る」とはどういうことか : 脳と心の関係をさぐる (DOJIN選書 ; 7) (化学同人, 2007)          ▲日常の何気ない行為、「見る」こと。単純で簡単なことのようにだが、その時、脳はとてつもなく複雑で多くの仕事をしている。「見る」ことの解明を通して、「脳から心が生まれる」という問題について考える。だれにでも理解できるように書いてあるが、そのめざすところは、脳科学の入門書ではなく、脳研究の最前線へのいざないである。</p>
<p>青竹正一 (高等司法) 野島博 (微研)</p>	<p>特別講義改正商法総則・商行為法 (成文堂, 2006)          分子生物学の軌跡 : パイオニアたちのひらめきの瞬間 (化学同人, 2007)</p>
<p>嶋海邦彦 (博物館) 竹蓋順子 (サイバー)</p>	<p>近世日本の地図と測量 : 村と「廻り検地」 (九州大学出版会, 2007)          VOA英語ニュース3STEPリスニング : 国際ニュース最前線にチャレンジ (語研, 2004)          ▲VOA (Voice of America) ニュースを効果の検証されているリスニング指導理論「3ラウンド・システム」に基づいて学習できる中上級レベルの英語学習者向け教材。「メッセージの理解」に目的を絞って、自然な速度で話される英語を聞き取るスキルを身につける。Step 1ではニュースの全体像を大まかに理解、Step 2では言葉で表現されている情報を詳細に理解、Step 3では言葉の背後にある話者の意図や解釈、結論を理解することを目指す。</p>
	<p>これからの大学英語教育 : CALLを活かした指導システムの構築 (岩波書店, 2005)          ▲大学英語教育を考える上で不可欠の視点を、指導システムとそれに基づく教材作成からカリキュラム開発と組織の意思決定の問題まで総合的に論じる。具体的成果を上げている聴解中心の基礎力養成のための指導システムを紹介し、それをCALL (コンピュータを利用した外国語学習) の形で大学教育にどう位置づけるのが有効であるかを考察する。</p>



## 「教員著作コーナー」を設置しました

### 本学の教員著作専用の本棚、できました

豊中本館、生命科学分館及び吹田分館の開架スペースに「教員著作コーナー」を設置し、本学教員の自著寄贈図書を集めて配架しています。

また、寄贈図書の紹介ページを図書館ホームページに開設し、著者自らが自著をPRできる場を提供しています。

附属図書館では、本学の教員の皆さんの著作を網羅的に収集し、本学教員の優れた教育研究活動の成果を学内外に広く公開する事業に取り組んでいます。著作を刊行されました教員の皆さんに、ご寄贈のお願いをしています。

詳しくは附属図書館 web サイトの教員著作コーナーをご覧ください。

附属図書館 web サイトの教員著作コーナー URL  
<http://www.library.osaka-u.ac.jp/kyoin/kyoin-kizo.htm>



## 国立大学図書館協会 シンポジウムを開催しました

### テーマ: 「若きライブラリアンの海外大学図書館研修」 ~ Global Librarian Network の形成を求めて ~

9月5日 (水) 豊中本館図書館ホールにおいて上記シンポジウムを開催しました。国公私立大学や民間からの参加者を含めて109名の参加がありました。大学図書館界においては、平成18年度に国立大学図書館協会が加盟館職員の海外派遣事業を開始したほか、多くの大学が各種のファンドを得、積極的に若手図書館員を海外の大学等に研修派遣しています。本シンポジウムでは、これらの図書館員が海外で体験してきた研修成果を発表しました。

講演内容等は、シンポジウム HP  
 (URL: <http://www.library.osaka-u.ac.jp/sympo/sympo.html>)  
 をご覧ください。





# 海外の図書館訪問報告

## ～アメリカ訪問記～

西森哲也

平成18年3月26日から4月6日の間、先進的図書館活動の調査のため、アメリカ東海岸を訪れました。訪問先は以下の通りです。

米国議会図書館、米国国立医学図書館、ジョンズ・ホプキンス大学図書館、ニューヨーク公共図書館、コロンビア大学図書館  
またボルティモアにて、米国大学・研究図書館協会年次大会に参加しました。この研修は希望者が海外研修応募書を作成し、審査の上選考されるというものでした。はじめての海外出張、それも単独出張ということで勝手のおわからないことが多く、自分にとっては大きなチャレンジになりました。

以下にその内容を報告します。業務報告というよりは、体験談という形でご紹介したいと思います。今回は米国議会図書館、米国国立医学図書館、米国大学・研究図書館協会年次大会についてお伝えします。また機会があれば、その他についてお伝えしたいと思います。



議会図書館アダムス館外観



議会図書館ジェファーソン館外観



議会図書館ジェファーソン館内装



議会図書館アジア閲覧室



関西国際空港からロナルド・レーガン国際空港まで14時間のフライトを終え、最初に訪れたのが米国議会図書館でした。

議会図書館といえば、蔵書1億3千万冊以上、年間来館者8千万人以上を誇る世界最大規模の図書館です。以前から一度訪れてみたかった図書館で、アメリカの出張を計画するにあたって最初に浮かんだのはこの図書館でした。

議会図書館では、外国人でも研究目的であれば利用のためのカードを発行してもらえます。アダムス館という建物の一室で簡単な登録作業を終えると、顔写真入りのカードが手に入ります。このカードでリーディングルームに入場できる他、書庫から本を取り寄せることができます。議会図書館のリーディングルームは分野ごとに分かれており、それぞれのカウンターにはスタッフが常駐していて気軽に質問できるようになっていました。議会図書館はアメリカの出版物に限らず世界各国の資料を収集しており、日本の文献も数多く所蔵していました。これらの資料を自由に利用することができるため、研究者にとっては非常に便利な環境だと思います。

アダムス館の隣に位置するジェファーソン館は、装飾的な建築の図書館で観光スポットとしても有名です。内装は図書館というより美術館に近く、観光客用のツアーやスーベニアショップも用意されていました。このツアーに参加した後、資料提供セッションで働いているスタッフにインタビューを行いました。

私は当時、生命科学分館の文献提供の部門で働いていたので、今回の出張では主にその関係のセクションのスタッフと交流をもつようにしました。議会図書館では世界中の図書館から毎日1千件以上の複写依頼を受けています。仕事の規模の大きさにも驚きましたが、最も関心をもったのは専任スタッフの専門性の高さでした。アメリカの図書館はライブラリアンの能力の高さで有名ですが、文献提供に関してはサービスの細やかさよりも作業効率が優先されることが多いため、専門性は成立しにくいのではないかと思います。しかし議会図書館のスタッフは幅広い依頼に対応するために、高いレベルの語学能力や蔵書、著作権に関わる知識を要求されているようでした。

その後、スーベニアショップでお土産を買って議会図書館を後にしました。ライブラリアン・アクションフィギュアという変な人形を売っていたので、おもわず買ってしまいました。



翌日、米国国立医学図書館を訪問しました。

米国国立医学図書館は医学分野に特化した専門図書館です。フリーアクセスの医学文献データベース、PubMed (パブメド) の提供機関としても有名です。生命科学分館という医学図書館に勤める身としては、どうしても訪問してみたい図書館でした。

米国国立医学図書館は議会図書館同様、外国人でも利用できます。図書館カードを発行してもらえると、閲覧・複写・パソコン利用等のサービスを受けることができます。医学図書館らしくディスプレイ向けのパソコンや設備、スタッフも充実していました。

またこの図書館では一般向けに展示を行っており、殺人現場の模型や頭蓋骨など、犯罪や戦争に関するものが数多く陳列されていました。案内してくれた方の説明によると、犯罪捜査や戦死者の身元特定に医学研究が貢献していることをアピールしているとの

ことです。図書館にそういった物騒なものが並んでいる光景がなんとも異様で印象的でした。

展示と閲覧室を案内してもらった後、事務室を見学させていただきました。ここでも文献提供のセッションでインタビューを行いました。

日本の図書館間での文献提供は、著作権法で公衆送信権が保証されているため、原則的にメール等を利用した電子伝送は利用できないようになっています。しかしアメリカでは同様の制度は存在せず、スキャナとインターネットによる電子伝送が可能です。そのため、より早く、より安くサービスを提供することが可能です。世界中から医学文献の複写依頼が集中する米国国立医学図書館では、書庫に何台ものパソコンとスキャナを設置して、より迅速なサービスを可能にしていました。また雑誌担当のライブラリアンと協力して電子ジャーナルの活用にも積極的に取り組んでいるそうです。他にもドックラインというシステムを中心となって運用するなど、文献提供に並々なめ力を注いでいることが感じとれ刺激を受けました。



米国国立医学図書館外観



米国国立医学図書館閲覧室

米国国立医学図書館訪問後アムトラックによってワシントンD. C. からボルティモアに移動しました。翌日から4日間、米国大学・研究図書館協会年次大会に参加しました。

米国大学・研究図書館協会は主にアメリカの大学図書館のライブラリアンによって構成される協会で、図書館機能と情報サービスの向上を目的としています。この年次大会にはアメリカに限らず世界各国から5千人近くの図書館職員が参加し、最新の研究成果の発表や事例報告が行われました。

私は日本の図書館大会にも参加したことがなく、年次大会というものに参加すること自体、はじめての体験でした。そのためか、このカンファレンスは驚きの連続でした。

まずカンファレンスの至るところに施された工夫に驚きました。初心者向けオリエンテーションはもちろん、名前集めゲーム（「出身地」「発表者」など項目にあてはまる参加者の名前を集めるゲーム）、写真コンテスト、昼食会など、参加者の交流を促進するイベントが数多く用意されました。また発表の事前配布資料がほとんどなく、その代わりにパワーポイントファイルや参考資料がネット上で提供されました。その他、会議録はもちろん発表を録音したMP3ファイルも販売されていました。これらの工夫のおかげで多くの図書館員と話す機会をもてましたし、帰国後も簡単に講演内容を確認できたので大変助かりました。またアメリカらしくエンターテインメント性も豊富で、ジョン・ウォーターズという映画監督のトークショーや水族館でのレセプションなども行われました。

発表内容も刺激的でした。

最も興味深かったのは、ゲームに関する発表が多数行われたことです。アメリカでは図書館におけるゲームの扱いがトピックになっており、例えばオハイオ州立大学ではゲームをコレクションとして積極的に収集している他、ゲーム大会も主催しているそうです。また、他の図書館では学生用のライティングスキルの教材として独自のゲームを開発しているとのことでした。

他にもグーグルと有料データベースを融合させたフェデレーションサーチやチャットリファレンスの業務分析、機関リポジトリに関する発表など、魅力的な発表がたくさんありました。

またワークショップに参加して英語で意見を交換したこと、現地の図書館で働いている日本人の方とも交流をもつことができたことも貴重な経験になりました。

4日間の日程は、最初は長いと感じていたのですが、あっという間に終わってしまいました。機会があればまた参加してみたいと思います。

(にしもり・てつや 附属図書館 利用支援課情報ナビゲート班)



米国国立医学図書館書庫



米国大学・研究図書館協会年次大会受付



米国大学・研究図書館協会年次大会発表風景



米国大学・研究図書館協会年次大会会場

# OPACが新しくなりました

2007年3月末より、本学のOPAC（オンライン蔵書検索システム）が新しくなりました。便利な機能が追加されましたので、使い方を簡単にご紹介します。

7月より、OPACから電子ジャーナルの検索とリンクが可能になりました。

http://opac.library.osaka-u.ac.jp

両方にチェックを入れると、検索した資料が大阪大学に無い場合のみWebcatを検索します。

検索対象を限定できます。ただし、白書や年鑑など、図書か雑誌かの判断がつきにくいものは、何もチェックせずに検索するのがオススメです。

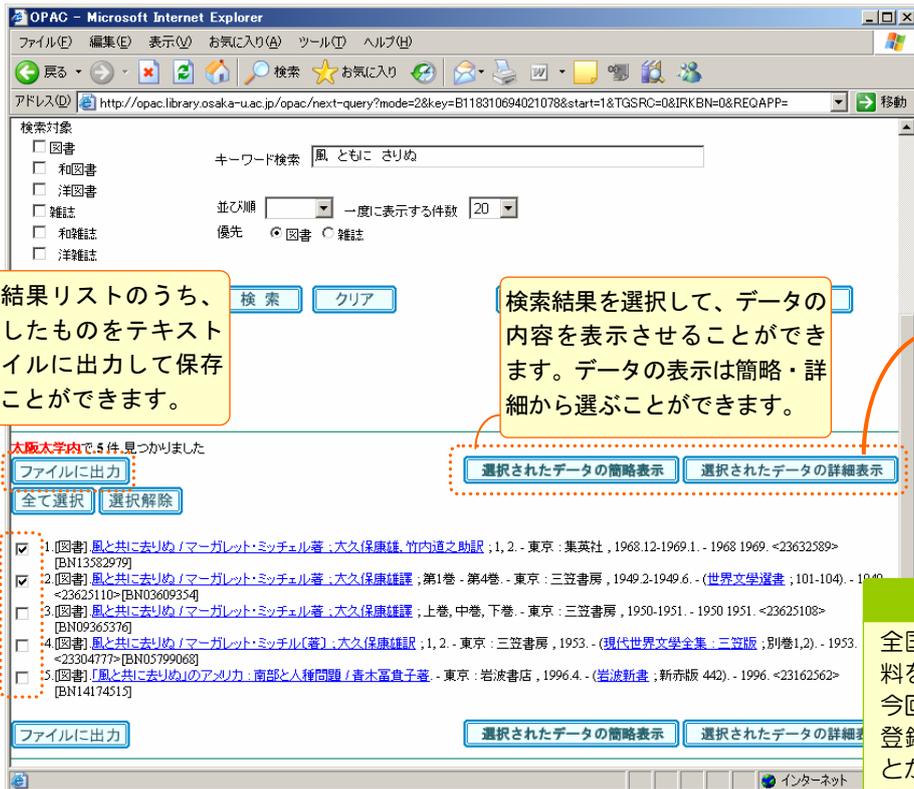
何も指定しなければ大阪大学全体から検索されます。「豊中の本館で手に入る資料だけを検索したい」といった場合には「本館」を選択しておくのがオススメ。「Ctrl」キー（Macではコマンドキー）を押しながら選択すると、複数選択ができます。



クリックするとヘルプ画面が表示されます。便利な検索語の入りのしかたなど詳しい使い方を知りたい場合にはここをクリック！

知っておくと便利！  
たとえばこんな入力規則が...  
英数字の大文字・小文字、全角・半角は区別しません。  
書名は漢字でもヨミでもOK。  
漢字の旧字体・新字体は区別しません。  
etc..

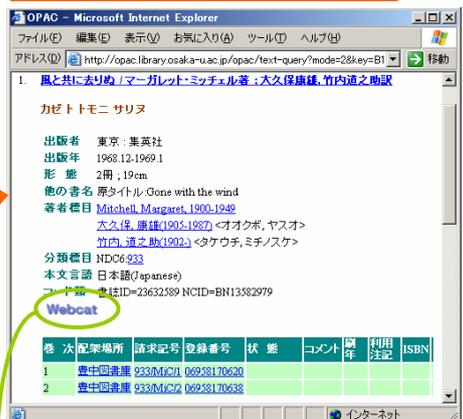
### 3 検索結果が表示されます



検索結果リストのうち、選択したものをテキストファイルに出力して保存することができます。

検索結果を選択して、データの内容を表示させることができます。データの表示は簡略・詳細から選ぶことができます。

### 4 詳細データが表示されます。



「Webcat」（ウェブキャット）とは  
全国の大学図書館などに所蔵されている資料を横断検索できるシステムです。今回新しくなったOPACでは、Webcatに登録されている資料を検索範囲に含めることができるようになりました。また、検索結果の詳細表示画面にはWebcatのデータへのリンクボタンも出ています。